



Title	「音声敬語法」 奥能登珠洲方言の場合
Author(s)	愛宕, 八郎康隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 19, pp.37-44; 1970
Issue Date	1970-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/32244
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T22:00:11Z

「音 声 敬 語 法」

— 奥能登珠洲方言の場合 —

愛 宕 八 郎 康 隆

1

敬語法は、一般には、「文法」という部門で扱われている。その場合、敬語事項として、例えば、「れる・られる」は、相手なり、第三者なりの動作に対する尊敬をあらわす助動詞であるとか、「いただく」は、謙譲の動詞、「ます」は、丁寧の助動詞というぐあいにとりあげられる。換言すれば、敬語事項としての敬語動詞、敬語助動詞などは、いわゆる尊敬・謙譲・丁寧の分類に基づいて叙述される場合が多い。

これらは、言わば、敬語事項としてとりあげられる諸語の語性に基づく、語法的処理と行うことができよう。

一般に、文献語研究においては、上のような叙述法が多いように思われる。もとより、それにはそれとしての、一定の意義を認めることができる。

ところで、音声の言語生活を凝視する時、そこには、文献語世界の敬語法とは、いくつかの面で異なる事実を見ることができる。両者の差異は、本質的には、文字言語、音声言語それぞれに本有の性格に基づくものと考えられる。

口ことば（＝音声言語）の立体性は、口ことばの「音声」の、次のような要素に支えられているものと考えられる。

①音声の高低②音声の大小③音声の強弱④音声の緩急：⑤声色⑥表情・身振り

現実の音声言語生活は、このような要素の複雑な組み合わせのうえに成り立っており、強く人間臭が打ち出される。しかも我々は、このような、音声の連続相のうえに、音声上の表情と呼びうるものをも受け取ることができる。

上述したような音声言語生活における音声の立体性は、まさしく、文字言語生活における文字とは、趣を異にしている。

このような音声言語における音声の立体性は、言語生活上、さまざまな特性面となつてあらわれるが、一体、「敬語法」（＝待遇表現法）の分野においては、どのような事実が注目されるであろうか。

2

音声のことは、常に対話のことはとしてある。対話のことは、つまり「対話文」には、常に相手への待遇意識が裏打ちされ、それが「対話文」述部の敬態の動詞・助動詞に、あるいは文末詞に、問投詞に、あるいは主部の人代名詞に、さらには、文の表現法自体や文の抑揚などに、複雑微妙に反映されるのである。

音声言語における音声の立体性に着目するならば、それが、待遇表現法のうえに、さまざまな形で反映されることは明白である。

例えば、対話上の“静かなもの言い”という、待遇表現にかかわる事実には、多分に、

音声の大小、強弱、緩急、抑揚などがかわりを持っている。また、東京の女性が常用する「ゴメンクダサイマシ。」は、「ゴメンクダサイマセ。」に比べて、やや、品位の高い表現とされるのも、[se]に対する[ji]に負っていることは明らかであろう。これは、前者「マシ」が連用形、後「マセ」が命令形というような、いわゆる文法上の活用形の相違というものではない。いずれも命令形の中での、音声上の、主としては、母韻の差異によるものである。(因みに、佐古玲子氏によれば、金沢ことばの「〜ミス」は「〜マス」よりは上という。)

このような事実は、例えば、「〜サマ」に対する「〜サン」などの接尾辞上にみられる待遇価の差異にも、それを認めることができる。

このように、音声上の差異、つまり音相によって、待遇意識の起伏、待遇価の高低をあらわす表現法を「音声敬語法」と呼びたい。

3

今回は、奥能登珠洲方言(石川県珠洲市)における「音声敬語法」の、いくつかの事例について述べてみたい。

・ 3・1・A

まず初めに、「ケ」系列・「カ」系列の文末詞のうえに「音声敬語法」の事実を見よう。ここに「ケ」系列の文末詞というのは、土地人が「ケーケー」ことばと呼称する一連の文末詞で、「ケ(ー)」、「ノケ(ー)」に代表されるものである。これらは「カ」系列の文末詞「カ(ー)」、「ノカ(ー)」と待遇価のうえで、けぎやかな対立を見せている。

「ケ(ー)」は、非問(問いかげのはたらきを持たないの意)のもの、問いかげのもの両者が区別される。まず、前者のものを見よう。

- 1 ○ター[○]スツサカイ イラッ[○]シ ケ。 あげるから来なさいね。(老女→幼男) 経念
- 2 ○マ[○]タ カシテ クダッ[○]シ ケ。 また貸してくださいね。(中女→老女) 正院
- 3 ○ヤスマッ[○]シンセ ケー。 お休みなさいねえ。(老女→中男) 馬渡<あいさつ>
- 4 ○ヤカ[○]ッテ イカッ[○]シ ケー。 キーツケテ イカッ[○]シ ケー。 マ[○]タ イラッ[○]シー。
お早くお帰りつきなさいねえ。用心してお帰りつきなさいねえ。またおいでなさい。(老女→中男)
飯田<別れのあいさつ>
- 5 ○ハカ[○] ヤランセ ケー。 せっかくおやりなさいねえ。(老女→中男) 経念<あいさつ>
- 6 ○ソ[○]ヤ。ソ[○]ヤ。ソ[○]ヤ ケー。 そうです。そうです。そうですよねえ。(老女→a) 杉山
- 7 ○ナンモ[○]ヤ ケー。 いいえねえ。(青女→中女) 大谷
- 8 ○コ[○]レ ケー。 これよねえ。(中女→老女) 角間

「ケ(ー)」文末詞は、1~5のように、敬態の述部を持つ文表現によくあらわれ、それも、あいさつことばに用いられやすい。ほかに、6・8のような強調や、7のような否定の表現にも用いられはするが、これらの場合は、頻度は低い。

土地人は、ひとしく「「ケーケーことば」は敬語だ。」と説明する。その敬語意識は、かならずしも相手への敬意のみに基づくものとは限らない。1の例文(これは、老婆から孫への表現)などは、ことばつきをでいねいという意識に発するものである。

このように、目上の相手への敬意、あるいは、ことばつきをでいねいというような意

識で運用される「ケ(一)」ことばは、品の良い持ちかけことばとすることができる。

土地人が、「ケーケー」ことばと呼ぶものの中には、上に見た「ケ(一)」(非問)とは、まったく機能を異にする問いかけの「ケ(一)」ことばがある。土地人は、それが非問のものであろうと問いかけのものであろうと、かまわずひとくくりにして、「敬語」とするのである。

次に、問いかけの「ケ(一)」を見よう。

- 1 ○ ナンジャ ーケ。コリヤー。 何ですか。これは。(老女→老男) 東山中
- 2 ○ ナンカ チビターイ モン アル ケ。何か冷たいものはありますか。(中女→同) 熊谷
- 3 ○ オツテ ケー。 おられますか。(老女→中男) 外山
- 4 ○ コリヤ ナンデンス ケー。 これは何ですか。(老女→a) 東山中
- 5 ○ オアン ナサリンシタ ケー。 召しあがられましたか。(老女→中男) 南山<あいさつ>
- 6 ○ アーントチ タベサシタ ケー。 あなたがたは食事をなさいましたか。(老女→中女達) 白滝<あいさつ>

問いかけの形式によるあいさつことばでは、5・6のように、ほとんどの場合、この「ケ(一)」が用いられる。あいさつことば以外でも、多少とも改まった問いかけの表現には、すべて「ケ(一)」文末詞が用いられるのである。

「ケ」系列の文末詞の中で、いまひとつ注目されるものに「ノケ(一)」がある。非問の文末詞「ケ(一)」の出自を代名詞「これ」(「ケー」←「コエ」←「コレ」)とするならば、「ノケ(一)」には、藤原博士もご指摘のように、「ノーこれ」(この場合の「ノー」は、「暑いノー。」などの感声的文末詞)の出自(「国語学」11輯P73)が考えられよう。珠洲方言では、この「ノケ(一)」が、後述の「ノカ(一)」文末詞に、待遇価のうえで対立するものとして、よくおこなわれている。

- 1 ○ ナマヌクラーイ ノケ。 むし暑いねえ。(老女→中男) 折戸<あいさつ>
- 2 ○ アツツイ ノケー。 暑いねえ。(老女→中男) 馬渡<あいさつ>
- 3 ○ エー ヒヨルヤ ノケー。 良いお天気ですねえ。(老女→中男) 経念<あいさつ>
- 4 ○ ナツカジーイ ノケー。 なつかしいねえ。(老女→a) 真浦
- 5 ○ ハリポーダラ クロベ カツキトカ ノケー。 はりぼうだら、くろべ、かつき(植物名)とかねえ。(老男→a) 外山
- 6 ○ アア ノケー。 あのねえ。(老女→a) 川浦

「ノケ(一)」は、1~4(いずれも、あいさつことば)のように感声味に富んだ、持ちかけ性の強いものから、5のように説明調の表現での持ちかけのものや、6の話の切り出しの持ちかけのものまで、巾広い活躍が見られる。

「ノケ(一)」は、いつの場合でも、身内の者の待遇表現には決して用いられることはなく、言わば、一種の家庭外敬語となっている。

以上のような、品位にまさる、それゆえに土地人は「敬語」と呼ぶ「ケ」系列の文末詞——「ケ(一)」,「ノケ(一)」——に対して、待遇価のうえで下位に立つ「カ」系別の文末詞——「カ(一)」,「ノカ(一)」が注目される。

3・1・B

「ケ(一)」(非問の文末詞)に対しては、「カ(一)」(非問)が、待遇価のうえで

対立を見せている。すなわち

- 1 ○エツ^下キ マ^タツシ カ。 しばらく待ちなさいねえ。(中女→少年) 白滝
- 2 ○アン^タ カ^カツシ カー。 あなた書きなさいねえ(老女→同) 栗津
- 3 ○ハ^ヨ イ^ラツシ カー。 早く来なさいねえ。(中女→幼女) 飯田

などのように、いずれも同僚・目下(親→子, 祖母→孫)への命令表現にあらわれるのである。

それでは、先の、問いかけの「ケ(一)」に対する。同じく問いかけの「カ(一)」はどうであろうか。これも

- 1 ○ト^ト カ。 とうさんか。(老女<母>→中男) 南山<息子が帰った気配がして>
- 2 ○コ^コ カー。 ここか。(中女<母>→少女) 飯田
- 3 ○オ^ラズカ^カヤ カー。 おらないのですか。(老女<母>→中男) 岡田
- 4 ○オ^マエ カー。 ツ^レテ^タノワ。 お前か。(牛を)つれて行ったのは。(老男→老女<夫婦>) 仁江
- 5 ○ツ^マン^デ ミ^ツ カー。 くじをひいてみるか。(少男→同<友達>) 杉山<独白ぎみに>
- 6 ○ミ^シ ス^マサン カー。 飯をすまさないか。(中男→中女<夫婦>) 馬渡
- 7 ○ソ^ー ホ^ー カー。 ソ^ー ホ^ー カー。 うんそうか。うんそうか。(老女<母>→中男) 栗津
- 8 ○ワ^レバ^ッカ^リ タ^ベル^ン カー。 お前だけ食べるのか。(食べてはだめではないか。)(老女→少男<孫>) 仁江

などのように、同僚(5), 目下, それも多くは, 親→子(1・2・3・7), 夫→妻(4・6) 祖母→孫(8)などのように, 家族間で用いられており, なれなれしい気分でのことばづかいになっている。

したがって, 「カ(一)」は, あいさつことばには用いられない。この点は, 先の「ケ(一)」とは, 明白な違いを見せている。のみならず, 「カ(一)」には, 「ケ(一)」には見出しされない用法のあることが注目される。いわゆる単純な問いかけや, 6のさそい, 7の納得などは, 両者に共通する用法であるが, 4の詰問, 5の独白, 8の反語の用法などは, 「ケ(一)」には見られない。このような差異は, 「ケ(一)」には詰問とか反語とかの用法を許さない品位が備わっているためと解することができる。

「ケ(一)」に対して「カ(一)」があったように, 「ノケ(一)」に対しては, 「ノカ(一)」が見られる。

- 1 ○ア^ツツイ ノ^カ。 暑いねえ。(中男→同) 飯田
- 2 ○ケ^ナルイ ノ^カ。 うらやましいねえ。(老女→同) 南山
- 3 ○ダ^レカ^カ サ^キニ イ^コヤ^ラ ノ^カカー。 誰がさきに成仏するやらねえ。(老男→老女) 真浦
- 4 ○ヤ^ット オ^リヤ ノ^カカー。 やつとわたしはねえ。(青男→老女<夫婦>) 外山
- 5 ○ホ^ンノ ト^ッシ^ョリ^ノ ヒ^トワ ノ^カカー。 ごく年寄りの人はねえ。(老男→中男) 角間

このように「ノカ(一)」は, ごく親しい隣人間, 特に家族間で用いられる品位の低い, 男性中心の文末詞である。1, 2の感声味を帯びた持ちかけのものから6, 7のような説明調の中止的表現の持ちかけのものまで, 用法の巾は広い。

3・1・C

上には、「ケ」、「カ」両系列の文末詞について、その用いられかたを一瞥した。それらの対立、対応の関係は次のように表示することができる。

系列	「ケ」系 列	「カ」系 列
種 類	a 「ケ(ー)」(非問)	「カ(ー)」(非問)
	b 「ケ(ー)」(問い)	「カ(ー)」(問い)
	c 「ノケ(ー)」	「ノカ(ー)」
待遇 価	高 い	低 い

ここに明らかなことは、珠洲社会の人々は、文末詞の種別が、a・b・cのいずれであろうとも、統一的に、/ke/に「高」の、/ka/に「低」の待遇意識を托している事実である。微視的に言えば/a/と/e/との母韻の広狭差を利用して、そこに、持ちかけことばとしての文末詞の待遇価を異ならしめているという事実である。

このような事態に、「音声敬語法」の1事例を見ることができる。

※表示したa・b・cのほかにも、次のような対立関係を示す文末詞が指摘される。

「ゾケ(ー)」 ↔ 「ゾカ(ー)」

「ワケ(ー)」 ↔ 「ワカ(ー)」

3・2

文末詞「ネ(ー)」と「ネン」との場合も、「音声敬語法」上、注目される。

「ネ(ー)」は、珠洲社会では、それほど盛んではないが、品位上、先の「ノケ(ー)」文末詞につぐものとして用いられている。

- 1 ○キ[↑]アドクナ [↑]ネ。 気の毒なね。(老女→同) 飯田<冬瓜を貰って>
 - 2 ○オヤ カン[↑]コイ [↑]ネー。 まあかしこいねえ。(老女→幼女) 上黒丸
 - 3 ○ヨカケ[↑]ンニ タ[↑]デニヤ [↑]ネー。 いい加減に家を建てなければねえ。(中女→中男) 善野
 - 4 ○ゾーデア [↑]ネー。 そうですたえ。(老男→a) 仁江<思案顔に>
- このような「ネ(ー)」に対して、
- 1 ○ゾーデス [↑]ネン。 そうですねえ。(老男→a) 角間
 - 2 ○ソ[↑]ンナカ[↑] [↑]ネン。 そうですねえ。(中女→a) 南山
 - 3 ○デカーイ アメヤ [↑]ネン。 ひどい雨ですねえ。(老女→a) 折戸
 - 4 ○ドコ [↑]イコヤイ [↑]ネン。 どこへ行かれますかね(老男→a) 飯田

以上のような「ネン」は、一段上品な、やさしみのこもった文末詞として用いられている。

1~4の諸文例はすべて、筆者(aで示す)待遇の表現に見られることにも注目したい。

「ネ(ー)」と「ネン」に関して言えば、珠洲人は、「ネ」に撥音を添えることによって、あるいは、「ネー」の長音部を撥音に変えることによって、そこに待遇価の異なる文末詞を生み出している。これまた、「音声敬語法」の1事例とすることができる。

4

珠洲社会における肯定の表現には、「エ」系列、「オ」系列の両系列のものがあって、待遇価のうえで、高低の対立が、よく見てとられる。

「エ」系列の肯定表現というのは、

- 1 ○エー ケ。 そうよ。
- 2 ○エー ケー。 そうよお。
- 3 ○エー ケヤー。 そうよねえ。
- 4 ○エー ケヨー。 そうよねえ。
- 5 ○エー ケノー。 そうよねえ。

などのような文表現であって、珠洲社会の中・老年層に広く聞かれる。

これらは、目上(1・2)、同僚(3・4・5)への応答にあらわれ、その文末部に「ケ」(既述)要素のあることが注目される。

これに対して、「オ」系列の肯定表現は、次のように、常に、同僚以下への応答にあらわれる。

- 1 ○オー ケヤー。 そうよねえ。
- 2 ○オー ケヨー。 そうよねえ。
- 3 ○オー ケノー。 そうよねえ。
- 4 ○オー カヨー。 そうよねえ。

これらもまた、珠洲社会に広くおこなわれているが、先の「エ」系列のものに比べて、一段低いものとされている。例文4の文末部に「カ」(「ケ」よりは待遇価の低い)要素の見られるのも、その低さ加減を示すものである。ちなみに、「エ」系列の肯定表現の文末部には、「カ」要素は見い出されない。

先の3.1.A.Bは、文末部にとらえられる「音声敬語法」であったが、ここには、簡潔な肯定文の文頭部に、/o/と/e/との母韻の広狭による「音声敬語法」の事実を指摘することがこぎる。

5

珠洲方言社会の断定表現は、種々の断定の助動詞によって導かれるが、その主要な助動詞としては、「デア」、「ジャ」、「ヤ」がある。

これらは、

- 1 ○ホンナカ[↑]デア。 そうです。(老男→同) 大谷
- 2 ○ユーカ[↑]オ ソレデア ワ。 夕顔というのはそれですよ。(老女→老男)
- 3 ○コンバン ヒトッデア カー。 今晚は一人ですよ。(中女→中男) 大谷
- 4 ○ホンナカ[↑]ジャ。 そうです。(老女→中男) 杉山
- 5 ○ソージャ。 ソージャ。 そうだ。そうだ。(中男→青男) 笹波
- 6 ○ソヤ トコトー。 そうですってばよ。(中女→a) 狼煙
- 7 ○ホンナカ[↑]ヤ ソキヤー。 そうですわねえ。(中女→同) 東山中
- 8 ○ソノコター ソヤ ソヤー。 それはそうですよ。(青男→中女) 馬継

のように用いられる。三者の分布状況は、かならずしも一様ではなく、「デア」が外浦地

方に、「ジャ」は、まばらに全域に、「ヤ」は全域に密にという概況であるが、珠洲人は品位と待遇価のうえで「ヤ」をなかでも良いことばとし、「デア」;「ジャ」は、まず等しなみで、「ヤ」よりも下位に立つことばとしている。[dea] [ʒa]・[ja]の中で、音声上、強い破裂や摩擦音を伴う音相の助動詞に、待遇価のうえで低い地位を与え、軟化した形の「ヤ」を「上」としているのは、これまた「音声敬語法」という観点から見て興味ぶかい。

これら一連の断定の助動詞のことは、先の文末部、文頭部に対して、述部末に見られる現象である。

6

述部末ということでは、いわゆる尊敬の助動詞「ンス・サンス」の命令形「ンセ・サンセ」と「イセ・サイセ」との音相に応じた、待遇価の差異が注目される。

珠洲方言では、女性が主用する、いわゆる尊敬の助動詞「ンス・サンス」がよくおこなわれている。やさしみのこもった、かなり高い敬語とされている。その命令形は、

- 1 ○ハイッテ ヲ ヤスマンセ ケー。 入って休みなさいねえ。(老女→a) 南山
- 2 ○オヤガッテ イランセ ケー。 お早くお帰りつきなさいねえ。(中女→中男<僧侶>
<別れのあいさつ>

3 ○アンタサンモ タベサンセー。 あなたさんも上へおあがりなさい。(老女→a) 高屋
4 ○カキデモ ボッテ タベサンセ。 柿でも取って召しあがりなさい。(老女→a) 南山
などのうよに「ンセ・サンセ」の形で、目上ことばとして、よくおこなわれている。この「ンセ・サンセ」に対して、

- 1 ○ソコニ オライセー。 そこにいなさい。(老女→老男<夫婦>) 真浦
- 2 ○アオッテ イカイセー カー。 急いで行きなさいよ。(老男<父>→中女) 北山
- 3 ○コレ ミサイセー。 これを見なさい。(中男→中女<夫婦>) 角間
- 4 ○カカー コドモデモ ツレテッテ トラサイセー ヨー。 かあさん、子どもでもつれて行って(草を)取りなさいよ。(老女<姑>→中女<嫁>) 白滝

などのような「イセ・サイセ」は、諸例によっても明らかのように、夫婦、親子間、あるいは姑と嫁との間というように、もっぱら家族間とか、ごく親しい同輩、目下に対して用いられる。

このように「ンセ」対「イセ」、「サンセ」対「サイセ」の間には、待遇表現上、かなりの開きのあることは明白である。換言すれば、この場合珠洲人は、/N/と/i/との音の差異を敬語法に、巧みに生かしているといえることができる。これまた「音声敬語法」の1事例とすることができる。

7

題目の「音声敬語法」を、文末部、文頭部、述部末と、文表現の次元でこれを見てきたが、「音声敬語法」の事態は、これを語詞の次元においても認めることができるのは言うまでもない。例えば

- アンタサマ→アンタサン→アンタハン (高→低)

○ジ[・]ー[・]サ[・]マ→ジ[・]ー[・]サ (高→低)

○バ[・]ー[・]サ[・]マ→バ[・]ー[・]サ (高→低)

なども、その1例とすることができよう。

8

旧来、言語研究においては、部門別（例えば「音韻」，「文法」，「語彙」など）研究ということが、一つの常識を形づくってきたようにも思われる。が、人間の言語現象が、個別化された部門の中だけでの討究にまかされてよいはずはない。

音声言語、ことに方言は、まことに人間臭の強い音声の言語である。「方言＝生活語」という場合の生活語は、音声による生活語である。生活語における音声の現象は、これを「音声生活」として受けとめるべきものであろう。とすれば「音声生活」のうえにとらえられる、さまざまな言語事実は、単に「音韻」の部門でのみの討究にまかされてよいはずはない。音声の事実はまた、文法—表現法の実事として受けとめられねばならない。

「音声敬語法」は、そのような主張の、ささやかな一つの試みにすぎない。大方のご叱正をお願いする次第である。

(1969.11.30)